

精神薄弱児のロールシャッハ反応 (Ⅱ) : 反応数、その他に関して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23545

精神薄弱児のロールシャッハ反応 (II)

… 反応数、その他に関して …

多 田 建 治

問 題

ロールシャッハテストは、今日、性格テスト、或は、投影法テストの代表的なものとして、臨床場面で多く用いられている。ロールシャッハテストは、現実吟味能力、防衛機制、要求体系とその統制、適応能力、統合能力などの自我機能を中心とした、人格の力動的側面を測定しようとするものであるが、一方、知能を測定するための一つの有力なテストだと言えないこともない。

Kelley と Barrera⁷⁾ は Klopfer たちの言葉を引用して、「ロールシャッハテストは、ビネのテストでは測定出来ない知的能力、すなわち、知的潜在力 (genuine capacity) と、知的効率 (actual efficiency) との差異を測定出来る。」と述べている。又、ロールシャッハテストは、情緒的生活の知的機能への影響が、抑制的か促進的かを決定し、精神薄弱の保護や予後を計画するうえで臨床的に重要な価値をもつものであると述べている。

ロールシャッハテストの精神薄弱への適用は、Rorschach H. が、「精神診断学」の中で、すでに精神薄弱の項目をとりあげている。Rorschach¹¹⁾は、知能のレベルを、ロールシャッハテストのサインでとらえて、魯鈍者は、F+% = 45~60, M = 0, C = 1~2, W = 1~3, A% = 60~80, O-% = 30~40, また、痴愚者は、F+% = 0~45, M = 0, C = 2~3, W = 0~2, A% = 70~100, O-% = 40~70, と知的鑑別法をあげている。加えて、精神薄弱

をグループとしてみると、F+%の低いこと、多くのC, Mの欠如, DWの多いこと, Wの少ないこと, 緩慢な継起型, 反応内容の範囲の少ないこと, A%の高いこと, O-%の高いこと等がその特徴である。

その後、Pfister と Beck (Kelley & Barrera⁷⁾より引用) は、これらの Rorschach の結果を確証した。Cの多いこと, F+%の低いこと, A%の高いことは、そのとおりだが, Wはそれほど少なくないこと, Rは平均21もあること, Do (Oligophrenia detail) 反応については検証出来ないと述べている。

また、Klopfer と Davidson (Kelley & Barrera⁷⁾より引用) は、知的レベルの指標として、1. Wの数と質, 2. Mの数と質, 3. 平凡な水準のF, 4. F+の数, 5. F-の数, 6. O反応の数, 7. 反応内容の範囲, 8. 継起型をあげ、このような要因を用いて、ロールシャッハテストは、他の知能テストと比較して、知能を評価するのに有効な道具であると述べている。

しかしながら、実際にロールシャッハテストを精神薄弱に施行した場合、かなり種々の困難な問題に出合う。とくに、I Qが60以下の場合には、ロールシャッハテスト施行そのものについて、施行法を考慮する必要があると思える。

Gallagher³⁾は、精神薄弱に対する投影法テストの問題点として、時間に縛られていること、刺激に縛られていることの問題、言語生産性が低く、しばしば解釈に必要な10個以上の反応を

与えてくれないこと、人格の中核を表わす感情的表現よりも、テスト直前の経験に影響された瞬間的感情を表わし易い、などの問題点をあげている。

一般に、ロールシャッハテストの解釈には、R(反応数)が約20必要だとされている。少くとも10以下のRのプロトコルに対しては、解釈が不可能だとされている。ところが、精神薄弱児のロールシャッハテストでは、Rが10以下という場合にしばしば会うものである。そしてまた、精神薄弱を被験者にした多くの研究論文では、Rが10以下のもの(8以下のものもあるが)は、統計的比較に際して、不十分な資料として排除するのが一般的やり方である。Rが10以下の場合、当然、拒否(Rejection)が多いわけだが、拒否には、意識的拒否と、知覚統合不全による拒否とがある。こうした拒否の多い被験者は、何故反応出来ないのか、実際に反応出来るだけの能力に欠けるのか、それとも、もっと施行法を工夫したり、或は、テスターが係り方を変えれば、もっと多くの反応が出来るのであろうかという問題が生じてくる。

この研究は、こうした反応数Rの問題を中心に、精神薄弱児のロールシャッハ反応の特徴を発達的に調べながら、当テストの精神薄弱児への適用の可能性について検討したものである。

方 法

1 被験者：養護学校生徒(精神薄弱児)、高等部27名、中等部17名、小学部23名、計67名、うち、男子40名、女子27名、IQ平均、56.1、標準偏差、14.5、範囲、32~94、CA平均、13才8ヶ月、標準偏差、40.1ヶ月、範囲、6才9ヶ月~19才3ヶ月、MA平均、7才7ヶ月、標準偏差、30.8ヶ月、範囲、3才0ヶ月~12才8ヶ月。

テスト実施期間は、昭和50年2月19日から、昭和51年4月28日まで。

2 手続き：(1)ロールシャッハテストは個人法で施行した。最初に、ラポールをつけるために少し雑談し、次のように言って、テストにか

かった。「これから、先生と少しお勉強をします。ふつうのお勉強とちがって、出来なくても出来なくてもいいから、気楽にやして下さい」。また、教示は次のように言った。「ここにあるカードをめくると、何か絵が描いてあります。(と言って1図を少し見せ、再び裏返す)。これを見ていると、何かいろいろと見えてきますから、見えたものは何でも自由に言って下さい。正しいとか、間違いとかは全然ありませんから、好きなように見て、好きなように言って下さい。「紙の上にインクを落として、紙を二つに折って、おしつけ、広げると模様が出る……」という。ロールシャッハ法の定例の教示だと、うまく理解出来なかつたり、「インク」という言葉にこだわったりする子供がいるので、「絵」という言葉を用いた。なお、採点は主にクローパー法を用いた。

(2) ロールシャッハテストに継続して、形と色(又は濃淡)の二次元からなる簡単な図形の分類テストを行った。これは、形又は色(濃淡)に注目できる能力があるかどうかを知るためのものである。用いた図形カードは、Fig. 1に示したものであり、教示は次のように行った。第一系列の図形カード9枚をランダムに並べて、「今度は違ったことを少しやります。ここにある図形を、同じものどおし集めて、3つずつ、3つの組に分けて下さい。出来るだけ早くして、出来れば、出来たと行って下さい」。被験者は、形か色(濃淡)のいずれかの次元に注目して分類を行うが、出来あがったものを、再び

Fig. 1 分類テストに用いた図形

第一系列	9ケの図形
(形)	○ □ △ (色) 黒 赤 黄
第二系列	16ケの図形
(形)	○ □ ⊕ ☆ (色) 赤 黄 緑 桃
第三系列	25ケの図形
(形)	長方形、正四角形、正五角形、正六角形、正八角形
(色)	灰色の黒に近いものから白に近いものまで5段階

ばらばらにして、ランダムに並べて、「今度は、今と違った分け方(別の分け方)で、同じものどおし集めて、3つずつ、3つの組に分けて下さい」。このようにして、第一系列から第三系列まで行った。

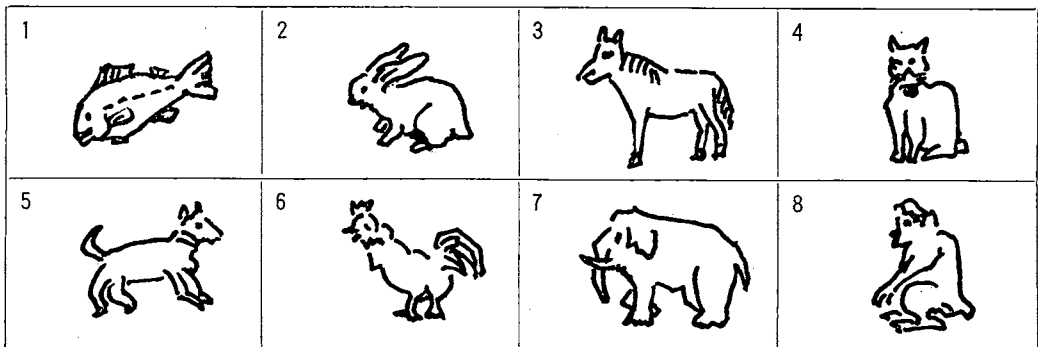
(3) 形・色分類テストに引続いて、重なり図形の知覚のテストを行った。これは、田中¹⁸⁾の研究で用いられたカードを参考にして、Fig. 2のようなカードを用いて、重ね合わせた図形から、それぞれの図形を分節知覚し、選択法により答える方法を採用した。このテストの目的は、混乱した事態から、一つの明瞭な図形を知覚し、

とり出す能力があるかどうかを知るためのものである。教示は次のように行った。まず、第一系列の8枚の比較図形のカードを一定の順序で被験者の前に並べて、1枚の標準図形のカードを、被験者に手渡ししながら、「ここに、いろいろな動物が見えますが、これと同じ動物が、この8枚のカードの中にありますから、そのカードを選んで下方にもって行って(またはテストに手渡す)下さい。何枚でもいいですから、出来るだけ早くして、出来れば、出来たと言って下さい」。第二系列以下も同様に、第四系列まで行う。

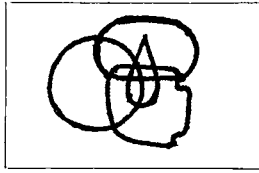
Fig. 2 重なり図形の知覚のテストに用いたカード

(第三系列は省略)

第一系列

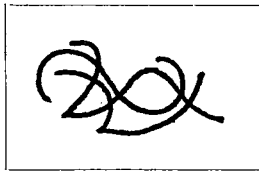


第二系列



1		2		3		4	
5		6		7		8	

第四系列



1		2		3		4	
5		6		7		8	

結果と考察

(1) 結果の処理：ロールシャッハテストの結果は、クロッパーの採点方式によって記号化した。各被験者の結果について、R, T/R, F%, F+%, M, FM+m, Fc+cF+c, FK+KF+K, FC, CF, C, W, A%, H%, CR, P, O%, 固執反応, くり返し (Repetition) %の項目をとりあげ、これらの結果を、MA段階別に、3~4才台、5~6才台、7~8才台、9~10才台、11~12才台の5つの群にわけて整理した。又、記号化されないテスト中の行動特徴として、イ) ラポール、ロ) モチベーション、ハ) テスト態度、ニ) 教示の理解、ホ) テスト・ショックの有無、ヘ) 質疑 (Inquiry) にうまく答えられる、ト) テストが終るとほっとした様子をする。チ) テスターへの反抗、拒否、リ) 不安、緊張、神経症傾向の、9つの項目をとりあげた。

また、手続き(2)の結果は、第一系列、第二系列では、形、色を、分類の基準として用いることが出来たかどうかを各被験者について調べた。第三系列では、分類に際し、濃淡にどの程度気づくかによって、濃淡に対する感受性のある、なしを4段階で評価した。

手続き(3)の結果は、標準図形と合致している比較図形が選ばれたとき、各1点を与えた。ただし、正解の数を越えて選んだときは、その超過した数だけ、負の得点を与えた。それゆえ、重なり図形の知覚のテストでは、図形分節能力の得点として、15点~0点の範囲の得点が各被験者に与えられた。

67名の各被験者について、Rの数、Mの有無、色彩反応、濃淡反応の有無、分類テストでの形、色、濃淡への感受性の有無、重なり図形の知覚のテストでの図形分節能力の得点を、MAの低い順に整理したのが、Table 1である。

(2) 反応数R：反応数Rを、MA段階別の5群にわけて表示したのが、Table 2である。Table 2をもとにして、RとMAの関連を知るために、ピアソンの相関を求めた結果、 $r = 0.43$ ($P < .001$) で有意な相関がみられた。ま

た、スピアマンの順位相関を求めた結果も、 $r_s = 0.40$ ($P < .001$) で、同様な結果であった。全被験者のRの平均は、13.1であり、(R=0の者を除外して)、他の研究より、かなりRの値が小さく出ている。

Rorschachは、¹¹⁾「精神診断学」の中で、「精神薄弱者は、てんかん患者と同様に、ほとんど平均以上の反応数を示す。これは主として、彼等にとってやさしくみえる課題をやって楽しむことのためである」と述べているが、この場合の精神薄弱は、成人の病院の患者であるためであろう。¹⁴⁾

Sloanの文献から引用すると、精神薄弱の反応数のNormとして、Beckでは、13~29、Klopferは、21、Sloanでは、11.4~23となっている。最近の研究をみると、藤本²⁾(1960)では、Rの平均、13.0 (I Q平均、54.5, CA平均、17才8ヶ月)、及び、15.8 (I Q平均、55.2, CA平均、17才6ヶ月)、藤本¹⁾(1959)では、Rの平均、21.8 (I Q平均、63.8, CA、12才4ヶ月~16才8ヶ月)、及び、21.9 (I Q平均、63.4, CA、12才7ヶ月~17才0ヶ月)、伊東⁵⁾では、16名のうち、15名が、11~19のR (I Q、60~80, CA平均、14.6)、佐々木、野口では、R平均、20.6 (I Q、不測定, CA平均、29才9ヶ月)、板谷⁴⁾では、Rの平均、19.3 (I Q、30~40, MA、2才6ヶ月~4才の施設児)となっている。

また、Ogdon & Allee⁹⁾では、R平均、16.23 (I Q, low~high, CA、15~28才)、Roseblatt & Solomon¹²⁾では、R平均、12.8 (I Q、28~81, CA、19~55才、ただし、R=8以上の者)、Sloan¹⁵⁾では、R平均、18.6 (I Q平均、68.9, CA平均、32~33才)、及び、15.4 (I Q平均、69.9, CA平均、31.87才)、Solomon¹⁶⁾では、R平均、13.5 (I Q、45~73, CA、20~40)となっていて、Rの値は、いずれの研究でもかなり大きい。これは、被験者のCAがかなり大きく、青年期から成人へかけての年齢段階であることも関連していると思われる。また、I Qも、Rとかなり関係がふかく、I Qが

Table. 1 各被験者のロールシャッハテストでのRの数, M, 色彩反応, 濃淡反応の有無, 分類テストでの形, 色, 濃淡への感受性の有無, 及び, 重なり図形の得点

被験者	M A	I Q (ピネ)	ロールシャッハ テスト				分類テスト			重 なり 図 形	得 点	被験者	M A	I Q	ロールシャッハ テスト				分類テスト			重 なり 図 形	得 点	
			R	M	色 彩	濃 淡	形	色	濃 淡						R	M	色 彩	濃 淡	形	色	濃 淡			
1	3:0	40	8				○				0	35	7:7	59	4				○	○				12
2	3:1	43	10				○				8	36	8:0	50	15				○		○	△		11
3	3:1	40	0								×	37	8:1	54	2					○	○			14
4	3:4	38	4				○	○			9	38	8:2	54	8				○	○				11
5	3:6	43	7				○				0	39	8:2	51	22	○	△	□	○	○	○	△		13
6	3:6	34	0				○				6	40	8:3	50	2				○					12
7	3:8	48	9				○	○	△		7	41	8:6	65	0				○	○				13
8	3:9	55	8		△		○				0	42	8:6	62	4				○	○	△			15
9	4:4	40	0				○	○	▲		13	43	8:8	60	37		△	○	○	○	○	▲		15
10	4:10	52	5				○	○	△		0	44	9:0	58	8	○	○	○	○	○	○	▲		14
11	4:10	50	0				○				3	45	9:0	50	28	○	⊗	⊗	○	○	○			15
12	4:10	32	0				○				11	46	9:0	44	26	○	△	○	○	○		▲		7
13	5:0	54	0					○	△		3	47	9:1	75	4				○	○	○			13
14	5:3	66	12		△		○		○		9	48	9:1	55	10				○	○				0
15	5:4	55	15	○	⊙	○		○	△		1	49	9:3	67	44	○	△		○					13
16	5:5	55	7				○				6	50	9:6	81	20	○	△		○	○	△			13
17	5:5	38	6				○	○			12	51	9:6	77	11	○	○	○	○			▲		15
18	5:6	45	28	○	△	○	○	○			0	52	9:6	67	33				○	○	△			11
19	5:8	37	13		▲	□	○	○			8	53	9:7	65	15	○			○	○	△			13
20	5:10	50	6				○	○	▲		12	54	9:9	65	30		△	⊗	○	○	○			14
21	5:10	40	11					○	▲		7	55	10:0	67	11			□	○	○	○			14
22	5:11	55	1				○				5	56	10:4	78	5				○	○	△			15
23	6:5	50	0				○				12	57	10:4	72	22	○	△	○	○	○	○			14
24	6:5	35	3				○				4	58	10:6	68	7				○	○				14
25	6:8	44	10					○	△		12	59	10:9	75	13				○	○	○			14
26	6:8	42	7		⊗	□	○	○	▲		5	60	11:0	60	24				○	○				10
27	7:0	46	10				○	○			8	61	11:0	57	0				○	○				6
28	7:0	39	9		△	○	○				14	62	11:1	64	30	○	△	○	○		○			13
29	7:2	47	15		△	○	○				14	63	11:3	94	23				○	○	△			10
30	7:3	50	3				○	○	○		15	64	11:6	75	8	○			○	○		▲		14
31	7:4	58	9				○				12	65	12:3	82	7		○	○	○	○	○			15
32	7:5	44	4			⊗	○				14	66	12:8	89	14		△	○	○					13
33	7:5	41	28		△		○				12	67	12:8	89	10	○	△		○	○				14
34	7:7	71	0				○	○	△		14													

(註) ロールシャッハテストの色彩反応は ○…FC △CF ・Cの出現した者
 “ 濃淡反応は ○材質反応 □通景, 拡散反応の出現した者
 分類テストの濃淡の感受性は ○完全に濃淡に気づく △殆んど完全に気づく ▲少しだけ気づく

80くらいの被験者の場合と、60くらいの場合と、40くらいの場合では、当然Rの値がかなり異なると予測される。板谷⁴⁾の研究は、CAが明らかでないが、IQが30~40の痴愚級の知的に低い精神薄弱児を対象にして、平均、19.3のRを得ているが、これは、施行法が定例の方法と異なり、カードごとに、一つの反応が与えられない時は、勇気づけや誘導質問を行っている。また、むずかった幼児には、お菓子を買ってやるなどの動機づけの要因があることが、大きなRの値を得ていることに寄与していると思われる。

Rは、一般に、知能とはあまり関連がないといわれている。抑うつ気分とか、防衛的であるとか、テスターに敵意を抱いていたりすると、Rが減少するといわれている。Rが一定の数（少くとも10個、通常は20個以上が解釈するうえには必要）に達しないときは、ロールシャッハテストの解釈は不可能であり、むしろ、何故、Rが少ないかを考察しなければならない。多くの実験的研究では、統計的に処理したり、統制群と比較するために、Rの少ない者は除外することが多く行われている。これは、その目的のためには有効な方法であるが、Rの少ない精神薄弱児も現実場面では、れっきと存在するのであるから、こうした者を除外することが、真の精神薄弱児群をとらえていることにはならないと思える。実際には、そこから、これら反応数の少ない精神薄弱児が、そもそも、ロールシャッハテストの被験者として適当でないのか、それとも、施行法を変えれば、もっと彼等から多くの反応を引き出すことが出来るのか、という問題が生じてくる。

そこで、Table 2をみると、MAが9才までは、半数以上が、Rが10以下であり、とくに、MA 5才までは、Rが非常に少なく、通常のロールシャッハテストの施行法では、彼等に、ロールシャッハテストをすることは不可能だと言っているようである。尤も、Rが少なくても、図版への係り方や、テスターへの態度などから、被験者の心理的特性をとらえることは出来るの

Table. 2 MA段階別におけるRの数

M A	Rの数						
	N	0	1 ~9	10 ~19	20 ~29	30 ~39	40 ~49
MA 3才~4才~	12	5	6	1			
5才~6才~	14	2	6	5	1		
7才~8才~	17	2	9	3	2	1	
9才~10才~	16		4	5	4	2	1
11才~12才~	8	1	2	2	2	1	
計	67	10	27	16	9	4	1

だが。その場合、ロールシャッハテストの結果を、採点して、解釈することは不可能に近い。Rosenblatt と Solomon¹²⁾の資料から、Jollesの研究では、MAが9才以上と以下とで、Rに非常に差があり、前者は、R平均、24.9に対して、後者は、R平均、17.5となっている。それ故、MA 5才と9才あたりに、それぞれ、一つのステップがあるようである。つまり、MA 5才までは、ロールシャッハテストに成人のように反応するということが出来ないと、そして、MA 9才になると、ロールシャッハテストの反応数が、一応、何らかの解釈出来るほどの数を得ることが出来るということである。そして、前述した諸研究で、板谷論文以外は、全て、MA 9才以上の青年や成人の精神薄弱を被験者としていることと一致するものである。

次に、混乱した事態から、一つの明瞭な図形を知覚出来る能力をみた、重なり図形の得点を、Table 1でみると、MAが7才以降になると、殆んどの方が得点が10点を越え、図形分節の能力が出来上ってくる。それに対し、MAが7才より低い者では、得点が10点を越える者は非常に少なく、でたために選んだり、また、教示を理解したと領きながら、実際に施行してみると教示を理解していなかったりする者が多くみられた。なお、重なり図形の得点とMAとの相関は、 $r = 0.516$ ($P < .001$)で有意な相関がみられたが、重なり図形の得点とRとの相関は、 $r = 0.170$ (n. s.)で有意ではなかった。

¹⁸⁾ 田中は、子供の知覚が成人の知覚様式に達す

るのは、8～9才頃であり、そして、重なり図形の正確度の発達曲線は、4才から9才にかけて急速に上昇すると述べている。ロールシャッハのインクプロットと、重なり図形では、図形の構成が全く異なるため、同一水準で考えるには無理があるが（とくに、ロールシャッハテストでは想像力が必要とされる故）、知覚様式の観点から言えば、MA、4～5才と8～9才のところで、それぞれ、一つのステップがあり、田中の研究の結論と一致するものである。なお、田中の研究で用いられている、埋もれ図形の知覚のテストも並行して行うべきであった。

小沢は、「幼児期と学童期に於て、ロールシャッハ反応様式が異なる。幼児期に於ては、自由連想の様相をより多くもち、学童期では、現実
10)に即する、いわば課題解決的な様相をより多く帯びてくる。したがって、学童期以降の年令では、ロールシャッハ法の用いかたは、ほぼ、成人の方法に準ずるといってよいと思う」と述べている。幼児のロールシャッハテストについては、言語反応の得られる、2才から一応可能とされている。そして、2才台では、「カードを弄ぶ行動」が多くみられ、2才から4才までは、「魔法のくり返し」という固執反応が多くみられる。そして、4～5才になると、これ等の反応様式は消失していく。幼児では、そもそも、テスト場面を設定すること自体が困難であるし、質疑も反応のすぐ後に行う方がよいとされている。幼児をテスト状況におくこと¹⁰⁾の困難さにもかかわらず、Ames（小沢より引用）らの研究では、50人の2才児のうち、40人が少くとも一つの反応を示し、反応数の平均は、9.6、範囲は、1～18にわたっているという報告がある。そして、3才から5才、6才となるにつれて、作話反応や、作話結合反応¹⁰⁾が増えてくる。幼児期に於ける反応数を、小沢の文献からみていくと、3才で、12.9（Ames）、13.8（小沢）、4才で、14.7（Ames）、17.7（小沢）、22.2（阪大）、5才で、13.9（Ames）、21.1（小沢）、22.3（阪大）、6才で、15.8（Ames）、21.1（小沢）、28.9（阪大）となっていて、成人の反応数に近

い値である。

そこで、これらの普通児の資料と比較して、精神薄弱児の反応数を Table 2 でみると、MA 9才までは、形式分析に必要な十分な反応数はなく、とくに、MA 3才、4才台では、反応数 0 という者が目立つ。そして、これらの反応数 0 の児童のなかには、必ずしもテストとの関係が悪くて、テストを拒否している者ばかりではなく、一生懸命考えてもなお解らない者や、言語の表現能力が非常に乏しい者などがいる。そして、これらの児童に於ては、小沢が述べている、幼児期の特徴の自由連想的反応が殆んどみられない。それは、これらMAが幼児期の子供に等しい精神薄弱児も、CAはかなり高く、学童期にあるので、自由連想的な要求があっても、訓練や教育を目指した、学校という環境の中で、それらの要求はかなり阻止されているのではないかと思える。彼等の心の中では、自由連想的な要求と、テスト状況を課題達成のための場面と受けとり、間違った答えや不合理な反応を抑制しようとする現実吟味能力との間に、葛藤が生じていて、そのために、なめらかな反応が出来難くなって、反応拒否が多く生じているのではないかと推測される。こうした、MAとCAのギャップのために生じる問題こそ、精神薄弱児の心理的特性として注目すべきものであろう。なお、この結果は、テスト状況の不備もあり、他の精神薄弱児の多数の結果を得ない限りは、一般化することにはかなり危険があると思う。

次に、ロールシャッハテストを施行している時の被験者の様々の行動、テストとの関係などが、反応数とどういう関係があるかを知るために、イ) ラポール、ロ) モチベーション、ハ) テスト態度、ニ) 教示の理解、ホ) テスト・ショック、ヘ) 質疑にうまく答えられる、ト) テストが終るとほっとする、チ) テスターへの反抗、拒否、リ) 不安、緊張、神経症的傾向、という 9 項目について、イ), ロ), ハ), ニ) は、+, ±, - という三段階評定、ホ), ヘ), ト), チ), リ) は、概当する者をチェッ

クするというテスト中の行動観察評定を、テスト終了直後行った。その結果と、Rとの関係を見るために、イ), ロ), ハ), ニ) は、 3×3 , ホ), ト), チ) は、 2×3 , ヘ) は、 2×4 , リ) は、 2×5 の分割表で整理したものが Table 3～Table 11である。各々、連関係数を求めた。その結果は、イ), ラポールとRの関係は、 $\chi^2=11.4$ ($P<.05$) で、C (CramerのC) = 0.29, ロ)モチベーションとRの関係は、 $\chi^2=8.0$ (n. s.) で、C = 0.24, ハ)テスト態度とRの関係は、 $\chi^2=11.4$ ($P<.05$) で、C = 0.30, ニ)教示の理解とRの関係は、 $\chi^2=12.1$ ($P<.05$) で、C = 0.30であった。また、ホ)テスト・ショックの有無とRの関係は、 $\chi^2=6.0$ ($P<.05$) で、C = 0.30, ヘ)質疑にうまく答えられるか否かとRの関係は、 $\chi^2=10.8$ ($P<.05$) で、C = 0.44, ト)テストが終るとほっとするか否かとRの関係は、 $\chi^2=11.4$ ($P<.01$) で、C = 0.41, チ)テスターへの反抗、拒否の有無とRの関係は、 $\chi^2=8.0$ ($P<.05$) で、C = 0.35, リ)不安、緊張、神経症的傾向の有無とRの関係は、 $\chi^2=3.4$ (n. s.) で、C = 0.22であった。

これらの結果より、テスターとラポールがよくついていた者は、そうでなかった者よりも、有意に反応数Rが多く、テスト態度が良かった者は、悪かった者よりも、有意にRが多く、教示の理解が良かった者は、悪かった者よりも、有意にRが多かったと言える。そして、質疑にうまく答えられた者は、そうでなかった者より有意にRが多かった。テスト・ショック (I図のカードを見せた時に、いやな表情や、暗い表情をしたり、考えこんだり、黙りこんだりする。また、プロットの記述や、コメントや、奇妙な反応がみられるなど)のあった者や、テストが終わるとほっとした表情や動作を示した者は、Rが有意に少なかった。また、テスターへの反抗や拒否 (知らん顔をしたり、テスターの意図に反する行為をするなど)が見られた者は、そうでなかった者よりも、有意にRが少なかった。なお、モチベーションの有無とRの間

には、有意な関係はみられなかった。不安、緊張、神経症的傾向 (いらいらして落ちつきがない、声や手足がふるえる、額に冷汗をかく、強迫的行為など)の有無は、Rとの間に殆んど関連がなかったが、Rの非常に多い ($R \geq 31$) 3名の被験者に、いずれもこれらの徴候があったのは、不安や緊張が反応数を多くする働きがあったともいえる。

被験者全体を通じて、反応数が他の研究より少なかったことの原因として、以上述べたようなこと他に、被験者が、これまで何回も、種々のテストを受けてきているので、テストそのものを快く思っていないことや、テストの自由度が大きいので、どう対処していいのかわからないで途惑うことや、テスターとの個人的関係、教示で、「一緒にお勉強する」と言ったので、場面をより一層、課題解決的に把握している。などといった様々の要因が考えられる。勿論、MAの低い段階の被験者達は、IQも低く、言語能力の乏しい者が多いことは言うまでもない。

(3) 人間運動反応M：精神薄弱のロールシャッハ反応の特徴として、一般にMの欠如があげられている。精神薄弱に於ては、Mは時にみられても、せいぜい1個であり、それもⅢ図のP反応の場合が多いとされている。Table 12より、Mのみられた者は、14人で、全体 ($R=0$ の者を除いて)の27%にすぎない。Table 12より、Mが1.5個以上の者は、5人しかいなくて例外的な少数人数である。また、Mのみられた者は、例外なく、Mのみでなく、形態反応以外の他の決定因、FM, m, Fc, FC, CF, Cなどが多くみられ、収縮していないパーソナリティーを示している。また、Mのみられた者は、A%が比較的低くて、常同性が強くないことを示している。Table 12により、MとMAとの相関は、 $r=0.33$ ($P<.05$) で有意な相関があった。なお、MA 5才台で、Mのみられた者が2名いるが、いずれも反応数が多く、自由連想的な作話反応がみられる。うち1名は、反応数が28もあり、細部にこだわる強迫的な傾

Table. 3 ラポールと R

ラポール R	-	±	+	計
0	3	5	2	10
1 ~ 10	7	6	19	32
11 以上	0	10	15	25
計	10	21	36	67

Table. 4 モチベーションと R

モチベーション R	-	±	+	計
0	6	2	2	10
1 ~ 10	12	9	11	32
11 以上	5	5	15	25
計	23	16	28	67

Table. 5 テスト態度と R

テスト態度 R	-	±	+	計
0	4	5	1	10
1 ~ 10	8	14	10	32
11 以上	3	6	16	25
計	15	25	27	67

Table. 6 教示の理解と R

教示の理解 R	-	±	+	計
0	7	2	1	10
1 ~ 10	18	4	10	32
11 以上	5	4	16	25
計	30	10	27	67

Table. 7 テスト・ショックと R

テスト・ショック R	ある	ない	計
0	6	4	10
1 ~ 10	11	21	32
11 以上	5	20	25
計	22	45	67

Table. 8 質疑にうまく答えられる、と R

質疑に うまく R	答えられ る	答えられ ない	計
1 ~ 10	5	27	32
11 ~ 20	5	7	12
21 ~ 30	7	3	10
31 以上	1	2	3
計	18	39	57

Table. 9 テストが終わってほっとする、と R

テストが 終わって ほっとす る R	ほっとす る	何もない	計
0	7	3	10
1 ~ 10	8	24	32
11 以上	4	21	25
計	19	48	67

Table. 10 テスターへの反応・拒否と R

テスターへの 反抗・拒否 R	ある	なし	計
0	6	4	10
1 ~ 10	10	22	32
11 以上	3	22	25
計	19	48	67

Table. 11 不安・緊張・神経症的傾向と R

不安・緊張・ 神経症的傾向	R	ある	なし	計
0		4	6	10
1 ~ 10		14	18	32
11 ~ 20		4	8	12
21 ~ 30		5	5	10
31 以上		3		3
計		30	37	67

向がみられた児童である。普通児の場合では、3才では、殆んどMがみられず、6才で、平均1個のMがみられる。小沢の結果では、8~9才以降、平均3個のMがみられている。これと比較すると、MA 6才以上の精神薄弱児の被験者に於て、殆んどMがみられていないのであり、Mの欠如は、MA 6才以上の精神薄弱診断の一つのサインと言ってもよいと思われる。しかしながら、藤本、伊東、Sloanの結果のように、MAが9才以上、IQ平均が、60~70くらいの被験者の場合では、平均、Mが1~2個みられているので、上に述べたことは概当しない。Mの欠如は、魯鈍級の精神薄弱児では、必ずしも概当しないで、痴愚級以下の精神薄弱児によく概当するものである。

(4) 形態反応、F%とF+%

高橋¹⁷⁾は、精神薄弱のロールシャッハ反応の一つの特徴として、F+%の低さをあげている。56名の被験者についての、F+%の平均は、84.66、標準偏差は、18.56であった。また、MAとの相関は、 $r=0.19$ (n.s.)であり、Beck⁶⁾(片口からの引用)の研究結果の $r=0.640$ に比べて、非常に低い相関であった。他の研究のF+%は、藤本の非行少年群では、39.3%、適応群では、65%、佐々木、野口の結果では、23.25%、Sloanの結果は、70%と74%であり、これらの結果と比較すると、当研究の大多数の被験者は、高いF+%を示している。低いF+%は、現実吟味能力の障害された、知的機能の不全さを示し、不適応のサインともいえる。

Table. 12 MA段階別にみたMの数

Mの数	0	0<M≤1	1<M≤2	4<M≤5	計
MA					
3~4~	7				7
5~6~	10	2			12
7~8~	14	1			15
9~10~	8	4	3	1	16
11~12~	4	2	1		7
計	43	9	4	1	57

この意味では、当研究の被験者達は、高いF+%を示し、現実吟味能力が障害されていない、自我機能の強さを示しているといえる。

しかしながら、F%の値をみると、平均、83.52、標準偏差、18.16と、非常に多くの形態反応を示し、色彩反応等の少ないことを考え合わせると、情緒表出の抑制された、慎重な反応をしていると言えらる。幼児や精神薄弱は、ロールシャッハテストに於て、プロットへの適合を無視して、独断的な反応を多く与えていくものであり、F+%が低いとされているが、当研究の被験者達は、そうした独断に対し慎重になって誤りのない反応をしようとするために、高いF%で示される収縮したパーソナリティーを示していると言えよう。小沢によると、F%は低い年齢に於て最も高く、F+%は逆に年齢と共に上昇する傾向があると言っているが、F%もF+%も高い、これ等の被験者達については、やはりCAとMAのギャップのために生じる、精神薄弱のもつ心理的な特性があらわれているとみてよいかもしれない。そしてこの場合も、学校教育や訓練の要因が大きく関与していると考えられる。

(5) 色彩反応と濃淡反応

F%が高い、これ等の被験者群に於て、色彩反応、濃淡反応の出現した者は少ない。FCは6人(11%)、CFは19人(33%)、Cは3人(5%)にみられたにすぎない。また、材質反応(Fc, cF, c)は20人(35%)に、通景、拡散反応(FK, KF, K)はわずかに7人

(12%)に見られたにすぎない。一般に精神薄弱では、FC、Fc、FK等はみられないのが普通であり、興奮型や情緒不安定の精神薄弱では、Sum Cが高く、C、CFがみられると、高橋は述べている。とくに、pure Cが多いのは、精神薄弱の診断のための一つのサインであるとされている。

色彩反応の発達は、おおまかに述べると、2才～3才は、CnとCによって特徴づけられ、幼稚園児(4～5才)では、Cが少なくなり、CF反応が盛んに出現する。そして、学童期6才になると、一つの転機となって、学校生活の開始とともに、情緒を統制することを学ぶ必要が生じ、CFも依然として多くみられるが、FCがみられ始める。そして、6才になると、FC:CFCの比に於て、FCが優位になる。普通児では6才以降にみられるFCが、精神薄弱児に於てはほとんど欠如しているのは、色彩と形態という相反する性質をもつ両者を統合する能力に欠けるためと思われる。

当被験者群に於ては、精神薄弱のサインといわれる、pure CやCnが殆んどみられないのが特徴である。Halpern(小沢からの引用)によれば、色彩反応は、個人と環境間の情緒的作用を示すものであり、子供が環境と溶けあっている間は、色彩反応は生じないと述べている。pure Cは、爆発性の情緒性の指標であり、幼児や脳器質患者や精神薄弱などではみられ易いものとされている。pure C反応の少ない当被験者達は、そうした爆発性の幼的な情緒表出は統制出来るわけだが、全般的な色彩反応の乏しさは、環境との間に軋轢のない恵まれた状態にあるのか、それとも、感情の動きの乏しい、外界からの情緒的刺激への関心の抑制や欠如を示しているとするべきであろうか。

材質反応、Fcは、MA7才以上では、かなりみられている。これは、7～8才で、材質反応が増加する。Ames(小沢よりの引用)の研究結果と一致している。MA6才以下では2名あるが、いずれも、Mのある児童であり、この2名は知能テストでは、MAが低くでているが、

潜在的にはもう少し知的能力が高いものと思われる。

そこで、色彩反応や濃淡反応と関連して、これらの被験者達が、色彩や濃淡に対する感受性があるかどうかを調べた、形・色分類テストの結果を、Table 1 でみると、殆んどの者(74%)は分類テストに於て、最初、形態を基準にして分類している。次に、「今とは違ったし方で分類するように」という教示の下で、色彩を用いて分類することの出来た者は、23人(35%)でしかなかった。また、最初から、色彩を基準にして分類した者は、15人(23%)いた。分類テストで、色彩を用いて分類出来た者、すなわち、色彩に対する感受性を有する者、と有しない者を、それぞれ、ロールシャッハテストの色彩反応の、ある、なし、との関連をみるために、Table 13のように、2×2の分割表で整理し、 χ^2 係数を求めた。その結果は、 $\chi^2=0.00$ 、 $\phi=0$ で、全く関連がみられなかった。

また、分類テストの第三系列は、濃灰色から淡灰色の5段階の濃淡を、色彩の代りに用いたものであるが、その濃淡の感受性(4段階)とロールシャッハテストでの濃淡反応の有無の関連をみるために、Table 14のように、4×2の分割表で整理して連関係数を求めた。その結果は、 $\chi^2=5.7$ (n.s.)、 $C=0.32$ で有意な関連はなかった。

このことより、色彩や濃淡に対する感受性の有無と、色彩反応や濃淡反応が出来ることとは無関係であることがわかる。つまり、色彩に注目する能力があっても、それを一つの反応として概念化するには、別の能力を要するのである

Table. 13 分類テストでの色彩の感受性とRテストでの色彩反応の有無

色彩への感受性	Rテストでの色彩反応		計
	ある	なし	
感受性 あり	13	21	34
〃 なし	10	13	23
計	23	34	57

Table. 14 分類テストでの濃淡の感受性と
Rテストでの濃淡反応の有無

濃淡への感受性	Rテストでの濃淡反応		計
	ある	なし	
完全に気づく○	6	4	10
殆んど完全に気づく△	4	9	13
少しだけ気づく▲	5	2	7
なし	9	18	27
計	24	33	57

う。また、当被験者達は、外界の刺激に対し、情緒的に関与することを抑制する傾向があるとも言えよう。勿論、こうした分類テストによる色彩や濃淡の用い方は、ロールシャッハテストの色彩や濃淡の用い方とは異なり、前者は、明確な図形を組み合わせたものであるのに対し、後者は、あいまいな、形態のはっきりしない図形と組み合わせたものであるので、両者の関係を言々することには多少無理があるともいえる。また、分類テストでの教示の中で、「違った分け方」が、一体何を求められているのか当惑する被験者もかなりあったと思える。

(6) その他

全体反応Wのうち、形態水準が正または0のWは、平均、4.95あり、形態水準が負のW-は、平均、1.28みられた。形態水準が正または0のWのうち、形態水準が1.5以上の良形態のW+は、平均、0.84であった。一般に、精神薄弱では、Wは少ないとされているが、当被験者達は、形態水準が正または0のWが、平均、約5個もあり、見通したとか、全体を総合する能力がかなりあるものと思える。これらの能力は、学校教育、訓練による、一つの効果ではないかと思える。

動物反応A%は、平均68.05%であり、MAとの相関は、 $r=0.05$ で相関は殆んどないに等しい。普通児のA%平均、約50%に対して、高いA%で示される常同性や、ステレオタイプな思考は、精神薄弱全体に共通なものといえる。また、人間反応H%は、平均、9.21%で、普通

児より少し少なく、对人的関心の少なさを表している。これらの結果は、他の研究の結果と一致するものである。

反応内容の範囲CRは、平均3.64で、MAとの相関は、 $r=0.22$ で、有意な相関ではなかった。CRの少なさは、生活領域の狭さ、経験の少なさといった精神薄弱の特徴を示していると思う。

平凡反応Pは、平均、2.29で、MAとの相関は、 $r=0.33$ ($P<.05$)で、有意な相関がみられた。普通児と比べて、P反応は少なく、精神薄弱児が他の多くの人と共通した考え方をしていけないことを表わしている。とくに、MAの低い精神薄弱児に於てP反応が少なかった。

独創反応0%は、平均、9.28%であり、精神薄弱児に特徴的な、独断的な傾向は少なかったといえる。

固執反応Repetition%は、平均、16.12%であったが、他の比較する資料がないので、どうとも言えない。

要 約

本研究は、精神薄弱児に対する、ロールシャッハテストの適用の可能性を検討することを目的とし、ロールシャッハテストに並行して、形・色分類検査と、重なり図形の知覚の検査を行った。その結果、次のようなことがわかった。

1) 通常のロールシャッハ施行法で、十分な反応数が得られたのは、MA 9才以上であり、MA 3~4才台の精神薄弱児では、反応数が非常に少なかった。MA 7才以下では、図形分節の能力が充分に発達していないことも関係しているであろう。

2) 色彩反応や濃淡反応は、半数弱の者にみられたが、形・色分類検査での、色彩や濃淡の感受性の有無と、ロールシャッハテストでの色彩や濃淡の使用とは関連がなかった。

3) 本研究の精神薄弱児では、自我機能が、間違った反応をしないようにしようとする現実吟味能力に重点をおき、そのために収縮したパーソナリティーを示していた。

引用文献

- (1) 藤本文郎：内・外因精神薄弱児の知覚行動の相違——ロールシャッハテクニックによる——，ロールシャッハ研究Ⅱ，P.155—158，1959
- (2) 藤本文郎：ロールシャッハテストによる精神薄弱児の人格診断，児童精神医学とその近接領域2，P.155—158，1960
- (3) Gallagher, J. J. : Measurement of personality development in preadolescent mentally retarded children, Amer. J. ment. Defic. 64, P.296—304, 1959
- (4) 板谷美代子：3才児のロールシャッハ反応——家庭養育児，施設養育児，精神薄弱児の比較——，ロールシャッハ研究Ⅷ，P.97—117，1965
- (5) 伊東恵子：精神遅滞児のパーソナリティに関する一考察——ロールシャッハ法による自我機能の観点から——，ロールシャッハ研究Ⅹ，P.159—180. 1969
- (6) 片口安史：ロールシャッハテスト心理診断法詳説，牧書店，1968
- (7) Kelley, D. M. & Barrera, S. E. : The Rorschach method in the study of mental deficiency ; A Resume, Amer. J. ment. Defic. 45, p.401—407, 1941
- (8) Klopfer, B. & Davidson, H. H. : The Rorschach Technique—An Introductory Manual—, Harcourt, Brace & World, 1962, (河合隼雄訳：ロールシャッハテクニック入門，ダイヤモンド社)
- (9) Ogdon, D. P. & Allee, R. : Rorschach relationships with intelligence among familial mental defectives, Amer. J. ment. Defic. 63, p.889—896, 1959
- (10) 小沢牧子：子どものロールシャッハ反応，日本文化科学社，1970
- (11) Rorschach, H. : Psychodiagnostik, Hans Huber, 1921, (東京ロールシャッハ研究会訳：精神診断学，牧書店)
- (12) Rosenblatt, B. & Solomon, P. : Structural and genetic aspects of Rorschach responses in mental deficiency, J. proj. Tech. 18, P.496—506, 1954
- (13) 佐々木昂，野口正成：ロールシャッハテストにおける図式的アプローチについて——精神分裂病，神経症，精神薄弱——，ロールシャッハ研究ⅩⅢ，P.33—40，1971
- (14) Sloan, W. : Mental deficiency as a symptom of personality disturbance, Amer. J. ment. Defic. 52, P31—36, 1947
- (15) Sloan, W. : Prediction of extramural adjustment of mental defectives by use of the Rorschach test, J. consult. Psychol. 12, P.303—309, 1948
- (16) Solomon, P. : Differential Rorschach scores of successfully and unsuccessfully placed mental defectives, J. clin. Psychol. 11, P.294—299, 1955
- (17) 高橋雅春：ロールシャッハ解釈法，牧書店，1964
- (18) 田中敏隆：図形分節に関する発達の研究，大阪教育大学紀要，第17巻，第Ⅳ部門，P.37—47，1968